
ネギま！の伝説

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！の伝説

【Nコード】

N9472S

【作者名】

白夜

【あらすじ】

あるところに少年がいた。その少年は、かつて時をまたにかけ冒険をし、世界を2度救った時の勇者だった。その少年は探していた。冒険の終で別れた、かけがえのない友を、その少年、リンクがたどり着いたひとつの神殿、そこにある封印された楽譜を吹いてしまい、時空を超えてしまう、その世界は…ネギまの世界だった。

プロローグ（前書き）

どうも、私は時のオカリナと風のタクトが大好きです。

この小説をお読みくださり、誠にありがとうございます。

これは初めて書く小説なので、なんじゃこりゃと思う方もいるかもしれません。

それでもいい人は、まずプロローグをどうぞ。

プロローグ

~~~~~

　ハイラルに伝わる王家の伝説、そこに一人の少年が登場する

　巨悪と戦い、ハイラルを救った後、彼は、伝説から、姿を消した  
　…

　時を越えた戦いを終え、彼は人知れず旅に出た

　冒険の終で別れた

　かけがえのない友を、…探す旅へ…

~~~~~

「ふう……。」

故郷であるハイラル平原に似た大地で馬をつれ、緑色の服と帽子を身につけている少年はため息を漏らす。

「今日もナビイは見つからなかったな……。」

この緑の服をきた少年、名をリンクという。

選ばれし者の証である勇気のトライフォースを左手の甲に宿し、伝説の聖剣マスターソードに選ばれた時の勇者として、七年の時を越えた戦いを終えた後、何も告げずにいなくなってしまった妖精の親友、ナビイを探して馬のエポナと共に旅をしているのだ。

「ハイラルとタルミナにもいなかったからこんなところに来たけど、ここはどこだろう……。」

友を探して2つの国を越え、ここまできたが、寝泊まりのことを考えていなかったのだ。

「食料とかは問題ないけど、雨が降って来たから、雨宿りできることを探さなくちゃな……ん？あれは……。」

リンクは偶然、デクナッツが住まう花である、デク花を見つけた、すぐさまリンクはデクナッツの仮面をかぶり、デク花を使って大ジャンプをするデクジャンプで辺りを見回した。すると、

「助かった！あれは、神殿か？」

少し遠くに神殿が見えた。リンクはうれしそうに言う。そして仮面をはずし、荷物を持ち、エポナに乗り、雨の降っているので、リンクとエポナは（主にエポナが）全速力で神殿に向かった……。そこが、リンクの冒険の新たなる旅立ちであることとは、知らずに……。

プロローグ（後書き）

なんだこりゃ！と思った人、ごめんなさい。えと、小説を書くのは難しいですね。ネギまの世界に行くときは、一部のアイテムは置いていくことにしようと思います。

（決してアイテムの量が多くて覚えるのが面倒だからではない、決して。）

異世界へ、そしてネギとの出会い（前書き）

一応このネギは、卒業試験前のネギということにしておいえください。
では、どうぞ

異世界へ、そしてネギとの出会い

「なんだか、この神殿は、時の神殿とハイラル城に似ているな・・・」

などとリンクは神殿に着いて、開口一番がこの言葉だった。

（エポナは外では濡れるので神殿のなかにいる）

「ああ、ボムチュウは火薬が湿気っちゃってる、デクの木は湿って火が付けられないし。」

とリンクは無事だった道具と濡れてしまった道具を分けていた、

「・・・つと！これでいいか！」

分け終えたリンクは食事を終えたあと、濡れた道具と多少の道具に毛布を巻いて置いておき、

エポナと共に、神殿を探索していた、リンクは、

「うーん、この神殿の名前はなんて言うんだろうなつと、ここは神殿の奥か、ん？あの石版は楽譜か？」

と神殿の奥までたどり着いたリンクは、大きな楽譜を見つけた、そしてリンクは何かに導かれるように時のオカリナをだし、その楽譜を吹いてみる、すると、

マスターソードに魂を封印された時みたいな感じがしたが、しかし、リンクがそれに気づいたときは、既にリンクが意識を手放したあとだった。

その石版に書かれていたのは、ある、言葉だった…。

「……ん……う……!はっ!」

目覚めるときは、マスターソードの封印を解かれた時のような目覚め方ではなく、
眠りから覚めるような起き方をした、すると、見慣れぬ天井が見えた。

「よかった、起きたんだね。」

と、声が聞こえ、その方を向いた、そこには、赤茶色の髪をしたをした子供が立っていた。

「僕はネギ・スプリングフィールドって言うんだ、君は?」

と聞かれたので、

「えっと、僕の名前はリンク。」

と言った、ネギは

「リンクくんか、君はいきなり空から現れて落ちてきたけれどどうしたの?」

と言うので、ものすごく心当たりがある。しかし、オカリナでワプをしたなど言ったら、頭がおかしいと思われる可能性があるので、何故だろう、と言っておいた。

ネギは、その手の甲や弓などから魔力が出ているから魔法を使うのかなど

言ってきたので少しは使えると返して、
まず、道具の確認をし、それに自分には、ナビイを探す目的がある
ため、

さっさといこうするが、ここがどこか把握するために、ネギに世界
地図を持ってきてくれと頼んだ。

ネギはすぐに出してくれた。そして、世界地図を見ると、

「な・・・！！？」

自分の知るハイラルやタルミナの名前はなかった。急いで、光のプ
レリュードや大翼の歌を
吹いてみたが、なぜかワープができなかった。神殿で吹いた楽譜と
いう心当たりが十分にあるので、

仕方ないと思うが、それしか方法がないので、ネギに事情を話し、
元の世界の戻るにはどうすればいいだろうと言うと、校長なら何か
わかるかもという提案に乗り、ネギの通う魔術学校というところに行
くことになった。そして、こつちの世界にも移動魔法があることが
分かった。

リンクは、これからどうなるのかという不安と、帰れるかもしれない
という安堵が、心の中にあった。

異世界へ、そしてネギとの出会い（後書き）

展開が遅いのか早いのか書いてる本人にはわかりません。

次は説明にしようと思いますので、早く原作の追いつきたいですね、では。

リンクの一人称を悩んでいます、できたらコメントください。

設定（前書き）

はい、今回はリンクの設定です。

なんか厨二設定ですが、すみません。

これはあくまで（仮）なので、後で変化するかもしれません

設定

名前

リンク

年齢

公式を見ていないので、10、11歳ぐらいとしておいてください。
青年時

本当に公式を知らないので、17、20歳ぐらいが主です。

容姿（適当です）

・身長≡子供時148cm 青年時（17歳）173cm

・体重≡子供時48? 青年時（17歳）63?

武器

・金剛の剣（コキリの剣の最終進化剣）

・コキリの剣（複製）

・ハイラルの盾（持てるようになったと思ってください）

アイテム（ゲームと同じであの小さな服にしまえて、どこから出せる）

トライフォース、デイン、フロル、ネールは魔力と同じで、体に宿っているみたいな感じで

・勇気のトライフォース（いつもは見えない、左手の甲に宿ってい

る、膨大な力がある、
引き出した時の状態は戦いの歌の比ではない。トライフォースの力をフォースと呼ぶ)

・デインの炎(スマブラのデインだと思ってください。力を込めることで雷の暴風的なことができるが、反動がすごい)

・フロルの風(印を残すと、そこに瞬間移動が可能、印を残せるのは一つが限界、飛ぶのにすごいフォースが必要。)

・ネールの愛(薄い魔法障壁を張り、直接攻撃や魔法などの威力を軽減させられる)

・勇者の弓(スマブラのように無限に出せる)

炎の矢(フォースを使い、魔法の射手のようなもの、連続で使える)
氷の矢(フォースを使い、動きを封じることができるけれど、もうい、連続で使えない)

光の矢(フォースを使い、障壁を貫通することができる、式神などを殺す(・・・)ことができる、連続で使えない)

・時のオカリナ(膨大なフォースが宿っているが、呪いで、能力が発動できない)

・爆弾(スマブラのように無限に出せる、弾幕を張ることができる、岩など、障害物を壊すのによく使う。殺傷能力は高い。)

・デクの実(一瞬で消えるので光る瞬間に目をつぶると意味はない、殺傷能力はない)

・真のメガネ(現実と幻術を区別できる、幽霊なども見ることがで

きる)

・ゴロンハンマー(重いので隙が大きく範囲が狭いが、威力は金剛の剣の2倍)

・鬼神の仮面(鬼など、主に人外のモノに使う、チート、切り札)

・アーティファクト?、『変化の仮面』(着けると姿が願った姿や年齢に変わることができる、幻覚ではない)

・ホバーブーツ、(そこへ意識すればその方向に行きたい空中へ行ける)

・フックシヨット、(ものに巻き付いて引き寄せる、そっちへ行くなど、多彩なことが可能)

・大妖精の剣、(両手剣、威力は金剛の剣よりちょっと上、強いて言うなら大ゴロン刀、精霊や妖精に好かれやすくなり、魔法の触媒にも使える。)

能力

元の世界より重力が軽いので、普通の大人よりは速いということに、スマブラの時のようなジャンプ力を持つ、足技も多少使える、剣技は我流。でも強い。

設定（後書き）

・・・っと、リンクの能力はこういう感じでいいでしょうかね、
無茶苦茶アイテムの数が減っています、すみません。

作者の都合でアイテムが増えるかもしれませんが、ご了承ください。
「表に出ろ、俺は出ないけど」さん、大妖精の剣、フックショット
のアイデアどうもありがとうございます！

魔法学校入学！（前書き）

前回の設定は、厨二すぎると思っ 方、すみません。

魔法学校入学！

とりあえず、明日、魔法学校に行くことに決まったリンクは、エポナのことを思い出し、

自分と一緒に馬が一緒にいなかったか？と聞くと、ネギは、

「えっと、馬具が付けられていなかった馬は、さっき村の方に走っていったけど、それ？」

と言ったので、多分それだと思う、村というには人がいるから、今日は少し辺りを見て回ってからにも村に行こうと思う、
と言うと、ネギはじゃあ、僕が散歩がてら案内するよと言ってきたので、頼むことにした。

・・・1〜2時間ぐらい、ネギに案内してもらい、最後に村に行った、やはり馬はエポナだった、

預かってもらった人にお礼を言い、ネギと共にネギの家へ行った。
ネギの通っている学校は、メルディアナ魔法学校と言って、あと1週間で卒業試験があるらしい。

リンクは、なぜネギは自分を泊めてくれるのかと聞くと、
寝ている間に少し道具を勝手に見てしまったからという理由らしい、
まあ、見られて困るということはないので、リンクとしてはラッキーだった。

次の日、リンクはエポナに乗り、ネギと魔法学校へと出発していた、
メルディアナ魔法学校は寮制で、昨日は掃除のために家へ戻っていたらしい、

メルディアナ学校に着き、ネギとリンクは校長室に向かった、（エポナは外にいます）

「こんにちは」「お邪魔します」

と言ってネギとリンクは校長室に入った。そして校長に事情を説明した、そして校長は、

「リンク君・・・と言ったかな？君はこの世界の人間ではないのかね？」

と言ってきた、ネギは耳など違う場所があると言ってきたのが少しリンクは傷ついたが、

帰る方法を知っていますかと聞いたが、知らないと言われたが、オカリナに強力な呪いがかけられていて、

ネギの父のナギスプリングフィールドほどの熟練魔法使いの魔力なら、

解けたかもしれないと教えてもらった、

呪いを解く呪文を教えてもらったが、なぜ熟練じゃないとダメなのかと聞くと、

魔力が多くなかったり、未熟だったりすると、暴走して逆に呪いが悪化したり、

その周りにいた人が呪いにかかったりすると言われたので納得した。これからその人に会いに行こうとしたが、さっきの解けたというのは過去形なのかと聞くと、

ナギはもう死んでいると言ったが、ネギは生きていると言った。なんでも悪魔がせめて来たときに

助けてもらったあと、形見の杖をもらったらしい。できれば生きていてほしいとリンクは思ったが、

これからどうしようと思っていると、校長に

「もし、行く宛がないのなら、1週間だけだが、この学校に少しだけ通ってみるか？」

と言われた。理由を聞くと、何回も死線をくぐってきた自分の実力が見てみたいかららしい。

早く元の世界に帰りたいが、この世界を知る時間が必要だったので了解したけれど、

ここの魔法は、自分の世界の魔法とは違うので覚えませんがいいです、すねと言うと、

その辺はなんとかしておこうというので、まあ、いいかなと言っておいた。

すると、ほかの教員には言うておくので、早速、ネギのクラスに行ってくれと言われた、

校長が呼ぶと、ネギのクラスの担任が現れたので、その人について行った。

ちなみに、耳のことは魔法で普通の人間の耳に見えるようにしてもらった。

魔法学校入学！（後書き）

自分なりに頑張りましたが、展開遅いですね。

何故、ネギと校長がすんなりと信じたのは、なんとも言えません、作者の都合と考えてください。

魔法学校の一週間（前書き）

これは、ネギま！？neoの0時間目ぐらいだと思ってください。
でも、卒業試験が終わってから、ネギま！の原作沿いになります。

魔法学校の一週間

リンクは、ネギのクラスの担任について行っているとき、元の世界に戻るため、

この世界のことを、ネギに教えてもらおうと思っていたので、ネギと同じクラスなのは、好都合であった。卒業試験は、一応参加するが、

そのあとの、立派な魔法使いになるための修行は、付いていけないと思っていた。

そうしてる間に、ネギの教室についた。

「ここが、たった一週間だけれど、君のクラスになる場所だ。」

と、担任は言ってきた。騒がしかったクラスが、先生が入っていったことで静かになったのを見て、すごいと思っていた。

「校長の要望で、一週間だけだが、新しい仲間を紹介する。」

そういうとクラスは、またクラスは騒がしくなった。

「入ってきてくれ。」

先生がそういうと、リンクが入ってきた、ネギは、校長室にいたので知っていて、ほかの人より静かだった。

「どうも、僕の名前はリンク。一週間ですけど、よろしくお願いします。」

そう言うalinkは、皆から質問攻めになった。

「校長とはどういう関係？」と聞かれると、「ただの知り合い」と答え、

「どうしてそんな緑色の格好しているの？」と聞かれると、「親友とのつながり」と言っておいた

・・・間違っではないよね、なんか同情の目で見られてるのは何故だろう、

「その背中の剣と盾は何？」と聞かれると、「自己防衛のため」と言っておいた。

そのあと多々、質問攻めにあってalinkは心底疲れきっていた。

一時間目の授業は実戦練習らしい、先生が「校長に全力で戦ってください」と言われているらしい。

alinkは実戦じゃないので、デイン、フロル、ネールと足技のみで戦うことにした。

まず先生は、詠唱を終え、「魔法の射手 連弾15矢」を放つてきたが、

alinkは、「ネールの愛」を発動し、魔法の射手の大群に突っ込んでいった。

ネールの愛の効果で、ほとんどダメージを受けていないalinkは、ひるむことなく先生の腹に足技を放つ、が、タイミングを合わせ、後ろに下がったので、先生には

ほとんどダメージはなく、跳んで、着地したあと、詠唱を終え、さっきの倍の「魔法の射手 連弾30矢」を放ってきた。

ドドドドド！「っ！うわあああ！」

リンクは、突然のことに反応できず、モロに魔法の射手を全弾くらってしまっ、

先生は慌てていたが、リンクは1発がボクサーのストレートぐらいの威力の技など、

数々の死線乗り越えてきたリンクには、ダメージを負っただけで、行動停止までには、いたらない。

煙と共に先生にただの「飛び蹴り」を放った。

今度は先生が、不意打ちに反応できずにまともに食らってしまっ。

「ハア！」ドゴォ！「ぐはっ・・・！」

先生が仰向けに吹っ飛んだ後、リンクは追撃とばかりに「踵落とし」をした、

だがそれは、当たる前に先生の腹の少し上で止まった。

「・・・僕の、勝ちですね。」

そう言っ、てリンクは、先生の体を起こした。

リンクは、魔法の射手を食らっ、ていて、さらに障壁を蹴ったが、それほどダメージはなかった。

「僕が治してあげる！」

とネギが言っ、てきたので、先生と共に治してもらった。

「あれ、ネギってその人と知り合いなの？」

と女の子がネギに言ってきた。

「うん、そうだよアーニヤ。」

とネギが女の子に言う、するとアーニヤと呼ばれた子が

「そう、はじめまして、アンナ・ココロウアです、アーニヤと呼んでください」

と言ってきたので、リンクは

「ああ、分かった、アーニヤ」

と返したあと、ネギにこの世界のことを教えてくれと頼み、一週間同じようなことのみをした。

一週間の間集めた戦闘データを見ていた先生は校長に、リンクのことを、麻帆良の校長に教えていた、リンクは、それをまだ知らない。

・・・明日は、とうとう卒業試験の日がやってきた。

魔法学校の一週間（後書き）

アーニャとネギは、誕生日が早いだけで同級生と誤ってくださいますね。戦闘描写って難しいですね。

卒業試験終了！（前書き）

どうも、テスト週間なのに書いてみました。

卒業試験終了！

「ネギ、卒業試験の内容はなに・・・？」

リンクはネギに聞いた、

「卒業試験が3人ペアのモンスター退治って・・・しかも千人の魔法使いを食べたって書いてあるよぉ・・・。」

アーニヤは、

「ふ・・・ふん！お、面白そうじゃないの！」

と強がりを言っていた。リンクは、少しも同様せずに、

「まあ、簡単には倒せそうにはないけど、倒せない相手ではないだろうね、そうじゃなきゃわざわざ自分の生徒に死ねと言っているもんだよ？」

と、リンクは言った。

（まあ、学園長から聞いた話では、千人食べたのは嘘で僕らの実力でも大丈夫らしいけどね。）

「そ…そうだよね！出来るよね！」「そ…そうよね！出来るわよね！」

と、ネギとアーニヤが2人揃って同じことを言った、2人とも仲がいいことだね。

そうリンクは思っていた。今は学校裏の森の中だ。

2人の装備は杖のみ、（ネギは魔道具を持っていたが、校長に杖だけと言われて置いてきた）

リンクは剣と盾やホバーブーツ（飛べないので）のみ、（ディン、ネール、フロルなどは使える、魔法だから）

…説明していたら、大きい足跡を見つけた、リンクは、少し警戒していた。

あとの2人は杖を構え、魔法の射手の準備をしていた。

・・・ズズウン・・・

・・・遠くから足音が聞こえてきた、ということはあそこにモンスターがいるのか、

そう確信したリンクは、

「ネギ、アーニヤ、今から足音が聞こえてきた場所に行くから、杖に乗って空へ付いてきて！」

と言ってリンクはホバーブーツを履き、森から抜けた、そこにはモンスターがいたが、

タルミナで、ツインモルド、を見ていたリンクは、それほど大きくは見えなかった。

それどころか巨人の仮面かぶった俺よりちょっとでかいだけじゃないか？と能天気なことを考えていた。

とりあえず、剣で斬るために、近くに移動し、そして剣で足を斬りかかる、が、

ギンッ！

とはじかれ、全く効いていなかった。

何度か攻撃したあと、リンクは一旦間を置き、相手はなんの反応も起こさない。そしてネギとアーニヤの方に向かっていった、

「2人とも、あいつの硬さは異常だ、攻撃しても何も反応がないことから見ると、多分あいつは、守りを重点的にするらしい、何か魔法の射手以外の攻撃魔法はもってないか？」

もしあれが攻撃的だったら、即刻に魔法使いたちが排除していただろう。

リンクは、剣と盾とホバーブーツと3種類の魔法しか、この試験では使えないので、そう聞いてみた。

アーニヤはまだ持っていなかったが、ネギは、もしかしたら出来るかもしれないと言った。

リンクはその言葉にかけてみた。

「アーニヤ、少し時間を稼げるか？」

と聞くと、アーニヤは少し時間を置いて、やってみると言った。そしてリンクはネギとアーニヤに作戦を伝えた、

アーニヤが「魔法の射手」などで気をそらし、その間に自分が全力のディンを放って、

火傷したところにネギの攻撃魔法を当てて倒す、という作戦だった。

（ほんとはリンクの力が知りたいから、全力というのは嘘だけだね。）

アーニヤは仕方ないと言う顔でモンスターの方へ向かっていった、リンクはディンのタメに入ったようにしたが、さっきの全力のディ

ンを放つための時間は、

長いと思わせるため、目を閉じ、佇んだ。

ネギは、攻撃魔法の威力を上げるため、魔力を静かに高めていた。

しかし、アーニヤがモンスターに捕まって、アーニヤに当てないため、

当たらないところに「ディンの炎」を放った、

「やあっ！」 ぼうんっ！

だが、ひるませるために使ったディンは、表面に焦げあとがついただけで、

さほど効いてはいなかった。だが、モンスターをひるまして、アーニヤを助け出すことに成功した。

ネギは、魔力を今使える最大まで高めた状態で、魔法を放った。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！

来たれ雷精 風の精！ 雲を纏いて吹きずさべ南洋の嵐……雷の暴風！」

ズドオオオオオオッ！

「グオオオオオオ……！」

と叫んでモンスターは倒れた、そのあと、アーニヤに

「なによ、時間稼いだのにあんたの魔法全然効いていなかったじゃない！しかもあれが全力！？」

と怒られた、リンクは、

「いや、でも、その稼いだ時間のおかげでネギの魔力が高められて最大の威力の魔法で倒せたじゃないか。結果オーライじゃない？」

と言つてネギを見た。ネギは、てへへ、と照れていた。

「そうぞよ」さあ、モンスターは倒したし、帰ろつか」最後まで聞きなさい！」

と、アーニヤがまた何か言いそうだったので、言われる前に言つておいた。

アーニヤが何か不満そうにしていたが。関係ない。
そしてリンクは、

「なあ、これ僕たちだったからこんな難しくなったのかな…？」

と言うと、ネギとアーニヤは少し苦笑いをしていた。真実は校長しか知らない…。多分…。

……そして、3人とも、魔法学校に帰ってきた、帰ってきたときは、

皆から「心配したぞ」とか、「スゲー！」とか「さすが！」とか言われて歓迎された。

そして今は、卒業式である、前にも言つたような気もするが、俺はもらわなかった、

魔法学校を卒業したら、普通は立派な魔法使いになるために、修行地へ行くのだが、

俺は、オカリナの呪いを解いて、元の世界に戻るために、ナギ・スプリングフィールドを探しに

魔法世界に行こう、としたのだが、卒業式の後、校長に呼び出されて、

「麻帆良で警備員をやらないかの？」と言われた。

理由は人材不足らしく、はじめは断ったが、

「麻帆良には、悪の最強の魔法使いで真祖吸血鬼の、エバンジェリン・A・K・マグダウエルがいるから、行ってみる価値はあるじやろう。」

と言われて、最強と呼ばれる魔法使いなら、オカリナの呪いを解けるかな、と思い、

OKを出してしまったのが悪かった、リンクは校長に騙されたのだ。今の彼女は、魔力を封印された、ただの少女（幼女）だったのだから……。

卒業試験終了！（後書き）

はい、そろそろ原作に追いつきます、先生じゃなくて、警備員にしたのは

まずかったかな、と思っています。

デインはスマブラのゼルダのあれだと思ってください。

巨人の仮面って、実際ツインモルド戦しか使い方が分からない

次回！リンクの仮契約カードが出ます！多分！

仮契約、魔法使いとパートナー！（前書き）

こんにちは、次回から原作が始まります。（多分）

今回は、リンクを少し強くしようと思ひまして、書きました。

パクティオーカードとかのことは、あまり知らないので、

ここが違う、こっちのほうがいいというところはコメントをください。

仮契約、魔法使いとパートナー！

「ああ、そうじゃ、リンク君、ネギ君、一分ぐらいたってから校長室に来てくれ。」

卒業式が終わった後、リンクとネギは校長に呼び出されていた。

さつきネギは、リンクは同じ麻帆良に行くということを、知ったのだが、

その時のネギのテンションが上がりまくっていた。

もっとも、リンクはエヴァンジェリンに呪いを解いてもらおうとしていくだけだが、

…そういうことを行っている間に一分たったので校長室に入った、そこには、

何故か、魔法陣が描かれてあった。

「「なんですか？これ？」」

とリンクとネギは同じことを言う。校長は、

「しばらく同じ所で修行（仕事）をするのだから、

もしものためにパクティオー（仮契約）をしといたほうがイイじやろうと思うてな。」

「パクティオー（仮契約）ってなんですか？」

とリンクは聞く、すると校長は、

「魔法使いとパートナーが「魔法使いの従者」の仮の契約を試すことじゃ。仮契約カードには、

、パートナーと念話できる、
、遠くから呼び出すことができる（限界5〜10km）、
、パートナーの能力や道具を発動できる、じゃ、
あとはオマケ機能で元の服装に加えて、好きな服をいくつか登録できる。
アデアット（来れ）でアーティファクト（専用アイテム）を出せて、
アベアット（去れ）でしまうことができるんじゃないよ。」

と校長が言つと、

「わかりました、強くなれるのならやります。」

とリンクが言つた。

「では、血を魔法陣に一滴ずつ落としてもらおう。」

「え・・・？」

「はい。」

ネギが少し顔が青くなる、リンクは剣で指先を少し切つて、血を一滴落とした。

「うっ、仕方がない…。」

とネギは諦めたかのように少し指を切り、血を一滴流す。

「ふむ…パクティオー（仮契約）成立じゃ！」

と校長が言つと、魔方陣が光り、リンクとネギの手にはカードがあ

った。

「へえ…これがパクティオカード…」

とリンクは感心する。

「うっ…。」

ネギは少し泣きそうになっていた。

リンクはネギを泣き止ませたあと、「アデアット」と言ってみると、カードが光り、リンクの手にはひとつの仮面があった。

「これが、アーティファクトですか？校長。」

「そうらしいのう、その仮面の効果はわかるか？ネギ君。」

「はい、それは、変化の仮面といって、姿や年齢を自由に変えることが可能らしいです。」

「へえ、じゃあ、早速変えてみようか。」

リンクはつけてみると、耳が尖っていない、十七歳の姿になっていた。

「おお、体が大きくなってるな。」

「ホントだね。」

「じゃ、校長、麻帆良学園に行ってきますー！」

「うむ、気を付けてな。リンク君、ネギ君よ。」

「はい!」

リンクとネギは、麻帆良へと旅立った。

く日本に行く船の中でく

「リンク君、エポナはどうするの?」

「エポナは、後で校長に麻帆良学園に送ってもらおうと思う。」

「そう、それで、いつまでその姿でいるの?」

「こっちの方が強いから、警備員の仕事はこの姿でいようと思う。」

「分かった、僕も先生の仕事を頑張るよ!」

「困ったことがあったら、いつでも相談に乗るからな。」

「うん!ありがとう!」

リンクとネギの卒業は、これから起こるであろうトラブルへの幕開けでもあった…。

仮契約、魔法使いとパートナー！（後書き）

仮契約の方法は勝手に変えました。

（リンクとネギのキスは耐えられなかったたので。）

リンクの仮契約カード

・称号…時を刻む者

・アーティファクト…変化の仮面（好きな姿と年齢になることができる。）

・徳性…勇気

・方位…中央

・色調…緑

・星辰性…太陽

・服の数…コキリ（緑）、ゴロン（赤）、ゾーラ（青）の三種類

原作突入！（前書き）

やっと原作まで来ました。長かったような気がします。

原作突入！

「ここが麻帆良か…。」

リンクは言った。いや、言わざるをえなかった。なぜなら、リンクはこんな広いところを見たことがなかったからだ。

（ここって、ハイラル城とかよりおおきいよね？）

『生徒の皆さん！今週は遅刻防止習慣です！余裕をもった登校をお願いします！』

その声でリンクとネギが我に帰る。

「リンク君！僕たちも早くいかないと！初日から遅刻じゃやばいよ！」

「ああ、そうだね。軽く走るか。」

そう言ってリンクとネギは走り出した。

「まったく！なんで私たちが新任の教師をお迎えしなきゃいけないのよ！」

同じ頃、リンクたちとは違う場所でオレンジ髪のツインテールの女の子が走りながら叫んだ。

「まあまあ、アスナ、そないなこと言わんとしてーや。」

その隣では、ローラースケートで走るおとなしそうな黒髪の女の子が言う。

「そうは行ってもよこのか。学園長の願いだとしてもなんでこんな面倒くさいことを…、

学園長の知り合いあらそいつもジジイに決まってるじゃない。」

アスナと呼ばれたこの少女、どうやら新任教師をお迎えするのにあまり乗り気じゃないらしい。

「あはは、アスナらしいなあ。」

このかと呼ばれた少女は、のほほんとして答える。

二人が走っていると、校舎前の階段に、緑の服を着た青年と赤毛の子供が階段を登っているのが見えた。

「この調子なら学園長との約束の時間には間に合いそうだな、ネギ。」

「うん、そうだね、リンク君。」

そして、リンクとネギが階段を登り終えるとき…。

「何やってんのよその二人ーーーーー!!」

「「うわあああああああ!!??」」「ビクウウッ!

と後ろから大きな声が聞こえた。リンクとネギは一瞬心臓が止まっ

たような感じがした。

「えと…誰ですか？」 「あなたたちは、誰？」

「そっちから初めに名乗りなさいよ！」

「それもそうか、俺はリンク、こっちがネギだ。で？あんたは？」

「……………神楽坂アスナ。」

「うちは近衛このかや。」

「えと、神楽坂さんと近衛さんですね。」

ネギは二人の少女の名の確認をする。

「そうよ！あんたたちはここに何の用？ここは麻帆良で一番奥にある女子中等部よ？」

「えっと、俺達は学園長に用があつてきたんだ。」

そうリンクが言うと、神楽坂は、

「じゃあ、あなたが新任の教師？」

と言うので、リンクは否定した。

「いや、俺じゃなくこっちのネギの方だ。」

否定すると、神楽坂が叫んだ。

「はあっ？なんでこんなガキが教師なのよ！」

「いや、ネギ君であっているんだよ、アスナ君。それと、お久しぶりです、ネギ君」

メガネをかけたダンディな人が窓から話しかけてきた。

「高畑先生、おはようございます。」

「ひさしぶり！タカミチー！ー！」

「ええっ！？知り合い！！？」

ネギが返すと神楽坂がものすごく後ろに下がった、ズゾゾゾゾという擬音とともに。

「あなたが高畑先生ですか？なら、俺達を学園長のところに案内してください。」

リンクがそう言つと、高畑先生は、

「私はこれから準備をするので、アスナ君、このか君、学園長の所まで案内をお願いできますか？」

高畑先生がそう言つと、神楽坂の顔が真っ赤になって、

「ははは、はい！わかりました！」

「はい、わかったえー。」

なんだか、神楽坂と近衛が案内してくれることになったみたいだ。神楽坂の反応を見る限り、高畑先生に惚れているんだろうね。

「じゃあ、頼んだよ、アスナ君、このか君。」

そう言つて高畑先生は窓の中へと消えていった。

「え…と、学園長のところまで案内を頼めますか？」

リンクがそう言つと、二人は案内をしてくれた。
一人は渋々だったけど。

〈学園長室〉

学園長はネギの言い分を聞いていた。

（あれ？メルディアナから連絡が来ていないのか？）

「なるほど、修行のために日本で先生を…そりやまた大変な課題を
もらったのー」

「は、はい。よろしくお願いします！」

「しかし、教育実習と言つことになるから、今日から3月までなん
ですね？学園長。」

リンクが学園長に聞く。

「そういうことじゃ。ところで、ネギ君には彼女がおるのか？どう
じゃ？うちのこのかなどは？」

学園長がそう聞くと

「大丈夫ですよ、学園長、ネギにはアーニヤがいますから。」

「ち、違うよ！アーニヤはただの幼馴染で…！」

リンクがそう言うと、ネギが慌てて否定する。
面白い…。

「ふおおおお、ネギ君、この修行は恐らく大変じゃぞ？二度とチヤンスはないが、その覚悟があるかね？ネギ君。」

ぬらりひょんみたいな頭をした人、すなわち学園長がネギにそう聞いた。

「……………はい！やります！やらせてください！」

ネギは失敗は許されないと聞いて、少し間を開けるが、そう言った。

「ふおおおお、そうだ、このか、アスナちゃん

ネギ君は住む部屋が決まったらんから、そちらの部屋に泊めてくれないかのう？」

そう言うと、神楽坂は、

「ええ……………っ！冗談でしょう！学園長！」

拒否するが、近衛は、ネギの方を持って、

「でも、可愛ーよ、この子。」

という。

「あたしはガキが嫌いな、ソファで寝ればいいでしょ!？」

何かこれが永遠に続きそうなので学園長と高畑先生のほうに向くと、学園長が頷く、

「さあ、そろそろ授業が始まるから、さっさと教室にもどるのじゃ。しずな先生に案内してもらいなさい。」

そう言つと近衛はニコニコと、ネギと神楽坂は気まずい空気が出ていった。

「さて、リンク君、じゃったっけか？」

学園長が聞いてきたので、

「はい、そうです。」

と答えると、

「話で聞いたとき、もっとネギ君と同じぐらいの年齢だと思っっていたんじゃないのう。」

と学園長が言うので、

「ああ、この青年の姿はアーティファクトの力ですので、実際はネギと同じぐらいです。」

そう言つてリンクは、「アベアット」と言つてアーティファクトを解いた。

正直、アベアットと言わないと下の姿に戻れないのが嫌だ、

願えば姿と年齢がかわればいいのに。

そこには、さっきの青年と同じ服を着た少年が立っていた。

「ほほう、なかなか面白いアーティファクトじゃな。」

そう言つと学園長が

「さて、そろそろ本題にはいろうか。」

「はい。」

「リンク君はメルディアナの校長の推薦でここの警備員になりに来たのじゃな？」

学園長がそう聞くとリンクは、

「はい、でも警備員の時は、さっきの青年の姿でいきます、こっちの方が力も強いし、リーチも長いですから。」

リンクがそう言つと、

「分かった。リンク君の部屋の鍵じゃ。」

深夜12時になったら実戦テストがあるので世界樹の元へ来なさい。

「

リンクは学園長に渡された鍵と、12時に世界樹前ということを知って聞いていた。

やがて、こうだった。

「実践テストですか、まあ、できる限り頑張ります。」

「ふおおおお、そうか、では、夜までゆっくり休むがいい。」

そう言われ、リンクは部屋を後に、自分の部屋に向かった。

「そういえば、なんで学園長、さっき空部屋があるのに神楽坂さんと近衛さんの部屋に

泊めさしてもらったんだろう……まあ、いいか。」

原作突入！（後書き）

ネギの魔力暴発がないなど、ところどころ変えています。
そろそろリンクの神楽坂とか、高畑先生とか、堅苦しい
呼び方は変えようと思います。

ネギの歓迎会（前書き）

今回、リンクの影が薄いです。

ネギの歓迎会

『リンク君~~~~~。』

『なんだネギ、相談か?』

今、放課後になった少しあと、ネギから念話通信があった。

『じゃあ、まず階段前に来てくれ。』

リンクはそう言ったあと、階段前に集合した。

「どうしたんだ?ネギ。」

「うう、まず、教室に入ったら黒板消しを障壁で受け止めてしまつて、

神楽坂さんに怪しまれてしまいました~~~~。」「

少し涙ぐんでそう言った。

「ははは…………。」

リンクは少し苦笑いをした。

「リンク君が同じ教師になってくれればいいんだけどな~~~~。」「

「ははは、俺は人に教えるのはあまりうまくないからいいよ。」「

「あ、一応これが僕のクラスの生徒たちね。」「

そう言ってネギは生徒写真を見せる。

ふと、階段上を見ると、本を大量に持ち、前髪を隠した女の子が階段を降りていた。

「あ、確かあの子は僕のクラスの宮崎のどかさんですね。」

「なあ、ネギ、落ちそうな予感がするのは俺だけかな？」

「いや、僕も危ないと思うよ。」

ぐきっ 「あうっ！」

そう言って宮崎さんは階段の高いところから落ちた。

「やっぱりね、ネギ！魔法で速度を緩めろ！」

そう言ってリンクは走り出す。

「う、うん！…えいっ！」

ネギが杖を振り上げると、宮崎さんの体が地面スレスレで浮いた。その隙にリンクはスライディングで宮崎さんの体を抱えた。

そして、ゆっくりと置くと、ネギの元へ行ったが、顔が青ざめていた。

「どうした…？ネギ…。」

「あ…あそこに…。」

リンクはネギが指を指した方を向くと、神楽坂がものすごいスピードで走ってきていた。

そして、リンクとネギの首元を掴み、引っ張っていった。

「あんたたち！やっぱり超能力者なんかだったのね！」

神楽坂がすごい剣幕でにらめつけてくる。

「あ、いや、僕は魔法使いで…。」

「どっちだって一緒よ！」

（いや一緒じゃないでしょう）

リンクはそう思った。リンクはバレないようにアスナの下から逃げ出して、

寮に戻ってきたが、そこには高畑先生がいた。

「こんにちは、高畑先生。」

「こんにちはリンク君、それと、僕はタカミチでいいよ。これから2 - Aで

ネギ君の歓迎会があるけれど、行くかい？」

とタカミチがそう言うのでリンクは

（まあ、僕はこれからすることもないし、まあ、いいか。）

そう思い、タカミチの誘いを承諾した。

リンクとタカミチが2 - Aに着くと、ネギがクラスの皆と話していた。

そして、リンクに気づくと、ネギがやってきて、

「ひどいや！勝手に居なくなるなんて！一人で対処するの、大変だったんだよ！？」

「ああ、悪い、だるそうだったから、先に帰ったんだ。」

ネギの様子を見る限り、本当に大変そうだった。

そして、リンクとネギが話していたのを見たネギの生徒が、

「ネギ君、誰？その人。」

など、そう言う質問が来て、答えていると、一人の少女がみんなをまとめていた。

「はい、ここは麻帆帆良のパパラッチ、朝倉和美にお任せを！」

（リンクが嫌な予感がした。）

「はい、すみません、取材、いいですか？」

と聞いてきたので、少しなら、と言うと、マシンガンのように質問が来た。

ある程度は答えたが、あとはタカミチに静止してもらった。

「はあ~~~~、疲れた…。」

「僕に比べたらまだましじゃない？」

（お前のおかげは何があつたんだネギ！）

すると、神楽坂がリンクとネギの袖をもって引っ張っていった。

「ネギ、さりげなく高畑先生に読唇術をしてきて！」

「…神楽坂さん？ネギに何を？」

「アスナでいいわよ。あんたも魔法使いなの？」

「いや、俺は少しだけ魔法が使える剣士だ。」

そう言ってリンクはどこかに行った。

階段を降りていると、アスナが走ってきて、ネギが遅れて走ってきた。

何か話していたけど、あまり聞き取れなかった。

そして、リンクは寮に戻り、12時になるまで、しばしの休息をとった。

ネギの歓迎会（後書き）

はい、神楽坂明日菜に魔法がバレる回ですね。
タカミチ、アスナなど、二人のキャラの呼び方がかわりましたね。

V S タカミチ (前書き)

今回は短いです。

V S タカミチ

リンクは、世界樹の真下にいた。

リンクの真正面にタカミチが立っていて、その周りを、魔法使いが一定の距離を置いて見ている。

そう、力量を図りたいというあれを今やろうとしているんだよ。

「リンク君、君の力量を見せてもらおうよ。」

そう言っているタカミチの構えは、ポケットに手を入れている状態だった。

『はじめ!』

ヒュッ スパアアン! ……ドサッ。

タカミチが放った訳の分からない技で、リンクの体は吹っ飛んだ。

(痛ってー! ネールで障壁作ってなかったら一発KO負けだったんじゃないか? これはしかも顎狙い!)

リンクは即座に立ち上がり、タカミチへ突っ込んでいった。

タカミチは衝撃波みたいなものを飛ばしてくる。

リンクは、ネールで防御しているので、

何度射ってきてても、多少は当たらない。

リンクは剣で連続攻撃(もちろん峰)するが、ことごとくよけられてしまい、

リンクは足払いをして、不意を付きタカミチの体制を崩し、横切りでタカミチに攻撃する。タカミチが吹っ飛ぶが、すぐに体制

を立て直し、

「…ふつ、強いね…君には本気を出さなければいけないようだね。
左手に魔力、右手に気…合成！」

感化法を使った。そしてまた、衝撃波みたいなのがとんできた。

今度は盾で防いだが、勢いを殺しきれず、後ろへ吹っ飛んでしまう。

「なんだよ、その衝撃波みたいなの…。てか、大砲かよその威力…。」

「これは居合拳と言って、居合抜きと同じ原理で、拳圧を飛ばして居るんだ。」

タカミチは説明する。リンクは思った。

（どんだけ速い居合抜きなんだよ、しかも連続で。）

しかしタカミチは、隙を一切与えてくれないので、

ビュビュビュビュン！！「つつう！ハア、これなら、ハア、どうだ！」ヒュッ、ボボボウンッ！！

そして爆弾を周りに何発か投げて、弾幕を貼り、

奇襲をかけた、振った剣がうまく剣が横腹に一発入ったので、そこから、回し蹴りをかました。

ズバッ…ドゴッ「ぐう…う…！」

（奇襲は次は通用しないだろう、なら、やられる前にやる！）

そして、すぐに体制を直し、倒れたタカミチの首のすぐ近くに剣をさす。

「ハア、学園長、ハア、勝負は？」

「う・うむ、リンク君の勝利じゃな。」

学園長とそのほかの者は、少し驚いてはいたが、リンクはタカミチとの戦闘で、結構痛手を食らってしまったので、周りの人に挨拶をし、寮に戻った。

この戦いで勝利を分けたのは、武器の数と作戦だった。

次の日は、タカミチとリンクは、怪我で一日安静にしておくように医者に言われた。

そして治った後、

「何故魔法で治してくれなかったんだ？」

と聞かれると、みんな黙ってしまった。

（まさか…忘れてたのか！？魔法使いが！？）

V S タカミチ（後書き）

いくらか飛ばしてみようかと思えます。
早く修学旅行編に行きたいです。

ネギの採用試験（前書き）

更新ペースが…

ネギの採用試験

タカミチとの戦闘から数ヶ月たった。

リンクは麻帆良の警備員となり、幾度か警備に参加した。

その時一緒になった桜咲刹那、龍宮真名と知り合いになった。

はじめの方は桜咲はお嬢様に〜と訳わかないことを言ってきたが、それは後日話すことにしよう。

そして今は。

「はあ、…何故俺が奢らないといけないんだ？」

「いいじゃないか、餡蜜ぐらい。」

「そうですよ、年上なんですから。」

（正確には俺は10歳ぐらいで、あんたらは14〜5歳だけだね。）

仕事がない日などは、そういうほのぼのとしたことが続いた。

ネギとのことも忘れずに話していた。

そしてある日、学園長に呼ばれると、

「ネギ君の採用試験の時に、魔法の本の情報を流してネギ君達を図書館島の奥で

特別勉強をさせようと思うのじゃが、その時、代わりの先生になってももらえねはせぬか？」

「……………ねえ、タカミチは？」

「出張じゃ。」

即答！？

「じゃあ、ほかの先生は…。俺、勉強全然できませんし…。」

「大丈夫じゃ。」

「いや、その前に資格そのものが…。」

「大丈夫じゃ、立ってればいい。」

「立ってるだけでしたら、ほかの人でも…。」

「やらないと、警備員から外すぞい？」

「そうですか…。」

それじゃいらないじゃないか？

そして職権乱用ですか、そうですか。

「決定じゃな。」

「……………はあ…。」

「という訳で、ネギのかわりに来ました。リンクです。」

「いや勉強できないんですか！？というか、お嬢様を助けるに」

「刹那、静かにして。あと、あの魔法の本の情報を流していたのは学園長だから、心配はないだろう。」

ネギ達が帰るのはテスト前までだからそれ程あそこに居ないと思うけどね。」

「リンク先生に質問ー！」

「なんですか？えっと、鳴滝姉。」

「年はいくつですか？」

「（今の姿は）20だ。」

などの、その他いろいろ質問を受けたが、リンクは最初の1、2回で質問に答えるのをやめた。

「自習プリントをタカミチからもらってきたから、それをやってください。わからないことがあっても聞かないでください。」

そう言ってリンクは有無も言わずプリントを配る。

ふとリンクがこのクラスの委員長がシヨタコンとアスナから聞いたのを思い出した。

…これでやる気も出るだろう。

「…そういや、これで最下位脱出しないと、ネギ、クビだったな。（ボソッ）」

「皆さん！絶対に最下位を脱出しますよ！ネギ先生をクビにさせないように！」

「……………おおーーーーー！……………」

（委員長達ずいぶん必死だな。）

リンクは1部を覗いて一斉に結束が固まったクラスに驚いていた。

しかし、近衛木乃香の護衛を任されている刹那は落ち着きがなかったが、

「刹那もそ・れ・程・勉強出来ないんだから勉強をして。ネギがクビになったらお嬢様が悲しむよ？」

それとも、バカホワイトとしてバカレンジャーに入りたいの？」

（学園長から近衛のことを出せば刹那は静かになると聞いていたが、バカレンジャーって…何？）

「うつ……………わかりました……………」

それ程を強調し、近衛のことを出したら刹那は素直に従った。それから力リカリと言う音しか2・Aからしか聞こえなかった。

テスト当日にバカレンジャーと呼ばれる5人+ が図書館島奥地から戻ってきた。

「ネギとバカレンジャーズ…だっけ？早くテストを受けて。」

リンクはそう言い、バカレンジャー+ はテストを始めた。

ある1部はバカレンジャーと言うことに怒ってた気がするが、あの5人の名前を知らないので仕方がない。そしてバカレンジャーって何！？

「よかったね、ネギ」

「うつ…はい…」

テスト終了後、結果2 - Aは1位だった。
ちなみに学園長から貰った報酬の半分、食券50枚を2 - Aにかけてみたら、大穴だったので、
何倍にもなって帰ってきた。

「後日」

「リンクさん、食券をそんなに持ってどうしたんだい？」

真名が聞いてくる。

「いや、2 - Aに賭けたらこうなった…。俺一人じゃ処理しきれないから奢るよ…。」

「本当かい？リンクさん。おーい、皆ー！リンクさんが最下位脱出したからって奢ってくれるぞー！」

真名が大声で2 - Aの人間に伝える。

「ちょ、真名！全員分おごったらすぐ無くな…。はあ、まあ、いいか。」

それから、約1週間も掛からず、リンクの予想通り食券は全て消えた…。

ネギの採用試験（後書き）

うん、リンクのキャラが思ってたのとどんどん変わっていく…

VSエヴァンジェリン

「計画停電？」

リンクは喫茶店にいた真名から計画停電のことを聞いた。

「うん、それで、今夜は学園結界がなくなるから警備を頼みたいらしい。」

「……それで、俺の担当はどこだ？」

「1人学園の外側をお願いできる？ 敵は鬼のみで、召喚士がいても1人いれば十分だから、遠慮はいらないよ。」

「そんなことはしないさ、同情で心が揺れたら、裏の世界では負ける。」

（実際に、そうだったしな…ガノンドロフに操られ、ヴァルバジアにされた、あいつの時みたいにな…。）

「…ああ、そのとおりだね。で、リンクさん。」

「なに…？」

「情報代で、餡蜜奢ってくれないかい？」

「分かったよ…。」

（……………今夜は鬼神でやるかな…？）

そのあと、リンクは夜になるまで時間を潰し、世界樹前に来ていた。しかし、魔法使いたちはリンクに警戒をしていた。

（分かつてはいたが、やはり、いきなり現れた俺のことは、信用できないか。）

「リンク君、頼んだぞ…。」

「ああ、分かっている。」

そうして、リンクは敵の眼前に来ていた。

「おおう？兄ちゃん？我らと戦い合うつもりなんか？」

鬼の言葉にリンクは仮面を被りながら言う。

「違う、お前たちを…貴様らを消すつもりだ。」

そう言いリンクは、衝撃波を飛ばし、一瞬で敵を消す。

「グハッ…兄ちゃん…いきなり雰囲気と姿が変わったな化けもんか…？、」

「…あのムジユラでさえ…これにはほとんど無力だったんだ、貴様らが勝てる道理があるはずがないからな。」

そう言い、リンクは召喚士を捕まえる。

「ひ・・・ひい！は、離せ！」

「それはダメだ。不法侵入の貴様は・・・な。」

そう言い、学園長の元へ受け取った呪符で送り付けたあと、どうするか悩んでいると、遠くから爆発音が聞こえた。

「?...仲間が戦っているのか...?」

そう言いリンクは、爆発音が聞こえた方に向かった。

その頃爆発音が聞こえた方では、

「フフフ...サウザントマスターの息子といえど、所詮は子供だな。」

「うっ.....。」

「さあ、血を吸わせてもらっぞ...。！?...ムッ！？橋の向こうから3つがここに向かって来ている！？」

2つは神楽坂明日菜、オコジョ妖精だとわかるが、なんだもう1つの禍々しいほどの魔力は！？」

そうしている間に3つの人影が見えた。

「ネギ！大丈夫！？」

「アニキ、しっかりしてくださいえ！」

明日菜とカモはネギに近寄るが、鬼神リンクは近寄らない。

ただ、橋の向こうから見ていただけ…。

「くっ！ジジイの回し者か！？」

リク・ラク ラ・ラック ライラック…闇の299矢！」

エヴァンジェリンの放った魔法は、リンクに届くことはなかった。

「なっ！かき消しただっ！？」

そう、鬼神リンクは魔力を宿した剣ひと振りでかき消した。

「…なるほど、魔力で相殺したか。…どうやらジジイの回し者じゃなさそうだ。だが、面白そうだ、おい貴様、私と戦え！」

「…いいだろう…こい、エヴァンジェリン。」

「エヴァでいい。そのかわり、貴様の名を教える。」

「ふむ、俺の名は…鬼神…。」

本名を名乗ってバレるのも嫌だったので、そうリンクは答えた。

「偽名か…？まあいいだろう、では、鬼神よ！戦おうではないか！」

「いけませんマスター！停電がもう復旧します。」

そう言い、エヴァは戦おうとするが、茶々丸に止められてしまった。

「ちっ、仕方がない、鬼神よ、また会おう！」

そう言いエヴァと茶々丸は去っていった。リンクはネギに少し応急処置をして、去ろうとしたが、

「あなたは何者？」 「あんた何者だ？」

「どういう意味…だ？」

鬼神リンクはその意味を分かっている聞き返すが、その足取りは止まらない。

「エヴァンジェリンをいとも容易く倒す奴が、なんで今まで気づかれなかったんだ!？」

カモはそれが聞きたかつたらしい。

「悪いが、それを教えることは出来ない…今はまだ…な…。」

最後の方は、聞こえないように言ったので、リンク以外に聞こえなかった。

(…絶対に正体を突き止めてやんよお!)

カモは気絶したネギの肩に乗り、そう決心した。

仮面を外し、元に戻ったリンクは、アーティファクトで青年になり、皆の所へ戻ったが、

リンクが大量の鬼を一瞬でどうやって倒したとか、いきなり禍々しいほど強力な魔力を感じたとか、

いろいろ騒いでいたので、気づかれないように寮に戻り、寝た。

V S エヴァンジェリン（後書き）

はじめのあれは漫画版ですね、ゲームではモグラたたきの要領で瞬殺の雑魚でしたのに…

質問 or お願い (前書き)

よく考えたら自称正義の魔法使いから見たら鬼神……やばくね？

質問 or お願い

「さて、リンク君、君には聞きたいことがあるのじゃが…いいかな？」

「……………はい…。」

翌朝リンクは学園長室で正座をさせられていた。
そして質問というのは、確実に鬼神のことだとリンクは分かっていた。

「それで、…君のいたところにもものすごい魔力を感じたのじゃが…
なぜか教えてもらえるかのう？」

やはり質問は鬼神のことだった。

「それは…この仮面ですね。」

そう言いリンクは懷から鬼神の仮面を取り出す。

「なんじゃ…？ただの仮面に見えるが…？」

「それは被ればいいんですよ。」

そう言うと、学園長はかぶってみたが。

「又オオオ！なんじゃこの飲み込まれそうなほどの力は！」

そう言い、急いで仮面を外す。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・この仮面は危険…じゃな。あまり、使わないようにしてもらえんか？」

「……………わかりました……………」

あまりにも一生懸命に学園長が頼むので、了解してしまった。

「それと、これからある修学旅行、3 Aについてもらえないかのう？」

「……………なぜですか？」

「ああ、このかはものすごい魔力を持っているのう。…狙われるんじゃない。」

「つまり・・・護衛してくれと。」

「……………うむ。頼めるか？」

「……………わかりました。やりましょう。」

リンクは大切な人^{ゼルダ}を守りたいという気持ちはわかるので、学園長の気持ちはわかるのだ。

「…ありがとう。」

「で、修学旅行はいつなんですか？」

「明日じゃ。」

「……………あ?」

そうして、リンクの修学旅行同行は決まった。

「服、どうしよう。ここから出たら認識妨害の魔法効かないし。」

「大丈夫じゃ。服は用意をしておこう。」

「装備は?」

「……………頑張ってくれ。」

「学園長おおおおお!?!」

質問 or お願い (後書き)

短いすね。

そういえば、みてみんで画像貼るのどうするのでしょうか？

修学旅行1日目（前書き）

遅くなりました。テストやばい、超やばい。勉強大嫌いだ。ちくせう。

修学旅行1日目

「はぁ〜、昨日は疲れた。」

昨日の修学旅行の護衛許可から1日、用意は少なくてよかったが、装備を持っていくことに苦労したリンク

「え〜っと、まず一日目は自由に動いていいけど、護衛も忘れずにだっけ？」

「はい、そのとおりです。」

「ありがとう、ちび刹那。」

「どういたしまして。リンクさん。」

今は、新幹線でネギ達より先に京都に向かっている。ちび刹那とは、刹那の式神で、リンクが新幹線など知らなかったので、それを刹那に話すと、サポートとして付いてくることになった。もちろん人前には出ていない。

「リンクさんって、本当はネギ先生と同じ年齢だったんですね。」

「うん、まあね、あっちの方が警備しやすかったし。」

「大人の姿はカッコいいですけど、子供の姿は可愛いですね。」

「それを言うのはやめて。」

今のリンクの姿は子供の姿である。子供の姿を知るのは、ここではネギと学園長、タカミチしかないなので、ネギの生徒達にバレずに警備できるのでらしい。

「でも、金髪って目立つし、顔も大人の姿の僕の姿とかぶるんじゃないか？」

「いいんじゃないですか？弟とかにしておけば。」

「うん、そうだね。そうしよう。」

そう言い、雑談しながら時間が過ぎた。

・そうして数時間後・

「やっと着いたね。」

「そうですね。」

ちび刹那とはバレないように念話で話すことになった。

「……？なんか周りに見られてるような……？」

そう、今リンクは周りに注目されている。実際、美形の金髪の子供が一人で自分の体以上の荷物を軽々持ち上げている姿は珍しいのであろう。

「……まあ、いいか、まず旅館に行こう。」

ネギ達が来るまで、リンクは周囲を調べたりしていた。

そして、だいたいの荷物は旅館に置いておき、

今持っているのは、護身用にコキリの剣とデクの実と真のメガネだけである。

（本当は体術だけで大丈夫だけどね。）

『そろそろネギ先生達が来る時間ですね。』

「うーん、もうそんな時間かー。」

『さっさと行きましょう。』

「分かってるよ。『ネギ、聞こえる?』」

『え? うん、聞こえるよ?』

『今からそっち行くからよろしくね。』

そう言い、リンクは念話を切り、ネギ達のもとへ向かった。

「…なにこれ。」

そうリンクが言うのも無理はなかった。

「リンク君、助けてー!」

今、リンクの目の前には、ネギの生徒たちが約半分酔いつぶれているのだから。

「…何が起こったのさ？」

「俺にお酒が混ぜられていたらしいんだよ。」

「…ああ、分かった、だいたいの状況は理解したよ。さっさと旅館に連れていったほうがよくない？」

リンクは周りを見て、そう言った。

「う…うん、分かった！皆さん、酔いつぶれてしまった人たちをバスに運ぶのを手伝ってください！」

「はあ、仕方ないなあ、僕も手伝うよ。」

（…刹那は、隠れて近衛さんの護衛をするのか、なら僕も隠れて護衛を手伝ったほうがいいかな？）

そして、バスで旅館へと向かい、数時間後、やっとの思いで酔いつぶれた全員をを部屋に押し込むことができた。

『刹那に、真名、何で手伝ってくれなかったんだろっ。』

『大人じゃなくて子供の姿だからじゃないですか？』

『あ…。』

修学旅行1日目（後書き）

ちび刹那登場ですね。そして、コキリの剣が出ました。すいません。護身用として増やしました。そして、出したの無駄になりましたね。デクの実とか

修学旅行1日目その2（前書き）

眠い（- -）。zzz…。リンク、なんかアイテムとかに恵まれてるよね。

そう言ってリンクは仮契約カードを取り出す。

「これは…変化の仮面？」

「そうそう、これで、！」

そう言っただ大人の姿になる。

「これで、信じてくれる？」

「・・・ああ、信じるよ。そこにちび刹那もいるしね。」

「ありゃ？バレてましたか。」

「ああ、魔力反応をつけておいたからね。」

「あれ？俺、大人になる必要なかったんじゃない？」

また、子供（元）の姿に戻る。

「何々？どうしたん？せつちゃん？」

「何があつたの？」

そして、すぐに酔わなかった3-Aの生徒たちが集まってきた。

「わあ、僕、どこから来たん？」

「え？っ！？」

そして、子供がいることに興味津々の3-A

刹那！助けて！

「え？あのちよつと、お嬢様？」

刹那が近衛を止めようとするが、

「どうしたん？せつちゃん？」

「う、し、失礼しますううう!!!」

「刹那ああああああ！！？？」

あえなく撃沈。

「じゃあ真名！助けて！」

「いや、面白そうだからこのまま見ておくよ。」

「真名ああああああああああああああああ！！！？？」

真名に見捨てられたリンクはこのあと揉みくしゃにされ続けた。

「ああ、…ゼルダのときもそうだったけど、女の人の好奇心はすごい…。」

「あはは、…僕の時よりひどいね、タカミチがいなかったから…」

「ああー、いい気持ちだー。」

「そうだねー。」

「そうっすねー。」

「…あれ？ここって動物禁止じゃ？」

カモについての疑問を言うリンク

「こまけえこたぁいいんすよ。」

それをやんわり否定するカモ

「…じゃあ、僕は先に上がるよ。武器の整備や調整もあるしね。」

「うん、わかった。僕はもう少し浸かっていくよ。」

リンクは先に出、ネギは残るようだ。

「じゃあ、またね。」

そう言い、風呂を後にするリンク、その後、リンクが出ていったあと、面倒なことが起こったのを知ったリンクは、安堵するのであった。

修学旅行1日目その2（後書き）

感想とか出来たらくださいお願いします。ではまた会いましょう！

修学旅行1日目その3（前書き）

ちなみに前回のゼルダに対する発言は漫画版のあれです。

修学旅行1日目その3

リンクが温泉から出てゆったりしていると、ネギから念話が来た。

『リンク君！このかさんがさらわれちゃったよお！助けて！』

どうやら、近衛さんが誘拐されたいらしい。だが、リンクにはさほど問題はなかった。

『ネギ、今の状況を詳しく話して。』

『えっと、まずトイレに入っていたらしいんだけど、いつの間にか御札と入れ替わってたらしくて、そしたら僕のところへ来て、追っかけているところなんだ！』

『分かった、近衛さんにはフロルの印というのを付けておいたから、ネギが思うここだと思うタイミングで行ってくれ。』

『分かった！』

そう言い、ネギは念話を切った。

「さて、まさか一日目で行動を起こすとは思ってなかったよ。まあいいか、まず精神を集中しよう。カードでの移動は届かないから、自分でいくしかないから。」

「ほえ、転移魔法も使えるなんてすごいですね。」

「これは印を付けておけばどこにしようが一回限り、そこに行ける

からね、だけど難点なのが、どの距離でもフオ、いや、魔力の消費量は膨大なんだけど。だから精神を集中しなきゃいけない。」

「へー、じゃあ、私は黙っていますね。」

「ありがとう。」

そう言いリンクは、変化の仮面で大人になり、相手の背後に立つよう転移するため、精神を集中させる。

『リンク君、今だ!』

しばらくしたあと、ネギから合図が来た。

その瞬間、リンクは緑色の光に包まれ、姿を消した。

くその頃く

「な、なんや!?なんで緑色の光の玉がいきなり出てくるんや!？」

近衛木乃香を拐った女、尼ヶ崎千草は混乱していた。

近衛を盾にし、攻撃できないとわかった瞬間、言葉を喋り終えたとき、緑色の玉は現れた。

「喜んでいるところすまないが、その人は俺たちに返してもらっぞ。」

不意にそんな言葉が聞こえた。その瞬間、千草の視界は反転していた。

その瞬間、近衛木乃香は腕の中から消えていた。

恐怖、それがニヶ崎千草の中に芽生えていた。

「お、お前は一体何者や…！？」

恐怖に対する勇気を振り絞り、言えた言葉は、それだった。目の前の緑に包まれた服を着た男にはただの青年に見える、が、裏の世界を生きてきた人間、ニヶ崎千草には、一目見ただけでわかる、この男には勝てない、と。

「俺の名前か、俺はリンクだ…つと！」

言い切る前にいきなり背後から現れた存在の攻撃をよけた。実際、『ネールの愛』は纏ってはあるが、ダメージを軽減させるだけのものであり、衝撃までは殺せない。それに今はこのかを持っているから戦闘は明らかに不利だった。

仲間を頼ろうとしても、ネギ、明日菜さん、刹那は一生懸命こっちに来ようとしているが、式神の相手ではなかった。しかし、リンクにはこの状況から抜け出せるアイテムがひとつだけあった。ロンロン牧場でマロンを助けるときに使ったフックショットが。

「うふふふ、はじめまして、わたしのなは月詠と申します。このお人はいちおー大切な人なんで守らせていただきますー、それにあなたの持つてるお人も連れていかなあきまへんしなー。」

そう言つて刀を振ってくる。その速さは凄まじいものだった。

（ぐっ！早い！それに二刀流だからやりにくい…！）

『ネギ！時間を稼げるか！？』

『え？』

『それが無理なら隙を作るか意識を何かに向けさせられないか！？』

『わ、わかった、やってみるよ！』

「ラステル・マ・スキル・マギステル！――――！」

呪文を唱え、尼ヶ崎千草を狙縛しようとするネギ、

「させませんえっ！？」

ネギの御思惑通り月詠の注意を背けることに成功した、その隙にリンクはフックショットを使い、ネギ達の近くの木に移動し、剣で式神たちを斬った。

いや、正しく言うとなフックショットで移動したリンクに攻撃しようとした式神を刹那たちが後ろから攻撃をした。

しかし、注意をそらしたせいでその対象がネギに向いてしまった。

「うわあああああ！！」

「しまった！」

リンクはこのかを刹那に任せ、急いでネギのもとへ向かうが、月詠の表情が変わった。

（！？これは罠だっ！）

そう、あくまでも月詠は強き者を求める。故に近づいてきたリンク

とネギの優先順位と言えば強いリンクの方が上だった。

ズバツッ！

「ぐっ！！」

片方は盾で受け止めたが、もう片方は受けきれず、左肩から腹まで浅く斬られてしまった。

「うふふふふふ、そっちから近づいて来てくれるなんて嬉しいわ。」

「くっ・・・！」

いくら『ネールの愛』で緩和したと言ってもダメージは蓄積する。

一瞬でもめくらましができれば…！

さっきのようにこのかを持っているのでリンクは自由に動ける、

「っ！」

何かを考えついたリンクは最後の賭けにで、月詠に向かって突っ込んでいく。

（これで外したら終わりだ！）

修学旅行1日目その3（後書き）

あい、すいません、作者は戦闘描写がグダグダになるのでこんな感じになりました。あるえー？ここで苦戦ってリンクやばくないか？
どうしよう…。

あ、ちなみに千草は気絶していますよ。

修学旅行1日目その4（前書き）

短いですが、そして、作者の力量不足でリンクが無茶苦茶弱くなってしまいましたすみません

修学旅行1日目その4

「こいつで、どうだっ！」

そう言いリンクは月詠に特攻していく。

「ふふふ、そんなふうにしてきてもうちにはかてないえ」
「アベアツト!!」
「っ!？」

月詠の振った剣は大人リンクの首を切り落とすために上の方を狙っていた、だから、いきなり小さくなったリンクに対応ができなかった。

「やあああああ!!」

ドスっ!

武器を投げ捨て、身軽になった今の子供状態で出来る精一杯の一撃を月詠にくらわせる。

フラッ・・・ドサッ

「うわっと、危なかった、あれでもし外れていたら僕の負けだった。」

そう言い、月詠を置き、捕まえようとしていたところに、声が聞こえた。

「まさか、月詠さんが敗れるなんてね。」

「っ、誰だ!？」

「こんばんは。」

そう言いながら少年は現れた。水たまりを使った転移魔法で、

「もう一度聞くよ、お前は誰だ!？」

「僕はフェイト、フェイト・アーウェルンクス。彼女らの仲間さ。」

「…なら、敵ってことで認識していいんだね？」

そう言いながらリンクは仮契約カードを取り出した。

「変化の仮面、使い方によってはものすごく恐ろしいものだ、君は大人しかないが、もしも誰かに成り代わって情報収集などされたら厄介だが、おそるるに足らないね。攻撃タイプじゃない、あくまでも状態変化の道具だ。」

その言葉にリンクは驚く、

（なぜ僕の道具がそれだと分かった!？絵柄を見せたわけじゃない、…待てよ、今の狙ったようなタイミング、まさか!）

「…ずっと、隠れていたの？」

「へえ、わかったの、」

「でも、月詠さんとの戦いの時に出てこなかったこと、後悔させてあげるよ！」

そう言い、攻撃しようとするが、すぐ溶けて消えてしまう。

「今回の目的は、近衛木乃香の『奪取』、それが叶わないのなら今回は引かせてもらうよ。」

そう言い、フェイトは後ろにいる仲間に魔法を使い、リンクが助けに行こうとする隙に逃げた。

「間に合え！」

フェイトによって放たれた魔法を盾で受け止めるリンク、

（！？ネギのより、重く、強い！）

やっこのことで弾き飛ばすが、

（月詠との戦いの時にこれを射たれていたら…、僕の、完敗、か。）

リンクは、自分の個々の力まだまだ弱いと感じた…。

その日は、近衛木乃香の救出に成功、そして、強大な敵との遭遇、この2つが大きな出来事だろう、少なくともリンクには、そう感じた。

修学旅行1日目その4（後書き）

リンクはまだ魔法を使った闘いに慣れていないから、こんなに弱いのだと思うてください、これが終わって、リンク達がエヴァに弟子入りしたら、急激にきつと強くなると思います。…多分。

修学旅行2日目(前書き)

すいません、忙しかったので、短いですが、そして、これは実際見なくていいです。

修学旅行2日目

近衛木乃香を救出したあと、そのまま帰り、それぞれの部屋に帰り、寝た。次の日、いろいろなところを回ったらしい、僕は遊びながら近衛さんを護衛した。その後、ロビーで

「で、なにしてるの？ネギ。」

「あ・・・うあ・・・え・・・。」

そう、今ネギはロビーの床でのたうちまわっている…すこし、見ていて面白い。

「…まあ、言いたくないならいいけど、しっかりしなよ、笑われるよ。」

そう言つてリンクは部屋に戻っていった。少したった頃、刹那から朝倉さんに魔法がバレたという電話が掛かってきた。…魔法って秘蔵じゃ？

「？…何か違和感が…？」

そして、この旅館全体にかけられた仮契約魔法陣に近くとも遠く気づいたリンクだが、それを異常はないとほっぽった。それがこの夜がにこんなになると思わなかった…。

コンコン、

「はい、今出ます。」

扉を開けると、そこには楓さん、クーフエイさんがいた。

「リンクといったネ、私と勝負アル！」

「リンク殿、拙者と勝負でござる！」

「…え？」

そして、いきなり攻撃してきたクーフエイを奥に投げ、楓を足払いで倒した。他の者が強いだけでリンクは決して弱くはないのだから。

「ごめんなさい、でも、いきなり攻撃してきたから、正当防衛ということで…。」

リンクが攻撃をしたことを謝っているのだが、

「やっぱり、強いネ、私のみこんだとおりヨ！」

根っからのバトルマニアたちには意味がない。

「まだ負けてはござらんよ、さあ、勝負の続きをするでござる！」

「ちょ、まってええええ！」

その後、なんとか倒したが、部屋がめちゃくちゃになった。

「はああ、武器で戦うのが主だからあんな狭いあんな狭い場所であるのは正直辛かった。」

そう多少の現実逃避しながら二人を新田先生に突き出した。新田先

生はお礼を言ったあと、あれだけ外に出たらと……とかブツブツ言いながら二人を連れてロビーに向かつていった。……3 - A 何やつたんだ？

「あ、あと、これを開いたっていう朝倉さんとカモを叱らなくちゃね。」

そのリンクの顔は、笑っているのに少し怖かった。

「っ！？なんか寒気がするぜ…。」

「そう？あたしは何も感じないけど…」

ガチャ
:

「ごめんください。」

「!?()()(; 。)() 力モの顔」

「あつねー、リンクくんじゃない、どうしたの？」

「いや、少し…ね。」

「あ、姉さん！逃げようぜ！」

「逃がさないよ。」

ガシッ！

「な、なんで邪魔するんすか!？」

「仮契約して戦力UPとお金を手に入れようとするなんてネギに聞いているからわかるよ。さあ、新田先生のところへ連れていくね。」

「いやあああああー!!」

その後、新田先生に1人＋1匹を引き渡した。そのあとは、しっかりと寝た。元の世界では戦いばかりで安眠なんてほとんどなかったから、しっかりと体を休めるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472s/>

ネギま！の伝説

2011年10月10日14時50分発行